データや方法論の問題改善，2）従来の日本の「イエ」研究との接点の明確化，3）近世から近代（明治）への接続，等が指摘された．また第4報告に対しては，「親になる」という概念の多義性が議論になった．第5報告に対してはこのような全国規模の調査への今後の期待や要望が述べられ，活発な討論が行われた．（岩澤美帆記）

1997年度人文地理学会大会

1997年度の人文地理学会は1997年11月15～17日，大阪市立大学（大阪府大阪市）にて開催された．人口研究に関連して以下の5報告があった．

地方都市における同心円地帯別人口分布の将来予測
－宇都宮市を対象としたマルコフ連鎖モデルの適用事例－
山口直人（宇都宮市役所）・大友　篤（日本女子大学）
わが国における近年の人口移動の動向　－全国移動調査結果より－
中川聡史・西岡八郎・小島克久・清水昌人（以上，国立社会保障・人口問題研究所）・
大江守之（慶應義塾大学）・若林敬子（東京農工大学）・井上　孝（青山学院大学）
戦前ハワイ・マウイ島の日本人　－居住地と出身地・職業構成－
飯田耕二郎（大阪商業大学）
人口増加離島における県外出身者の分析　－沖縄県座間味島を事例として－
宮内久光（琉球大学）
ビコール地方ココナツ村落の人々と生存戦略
田中定仁（聖学院高等学校）

第1報告はＧＩＳとマルコフ連鎖モデルによる小地域の将来人口推計，第2報告は本研究所が1996年7月に実施した第4回人口移動調査の調査結果の概要である．第3報告では戦前の日本からハワイの農村部への移民の出身地，職業が整理された．第4報告は，観光産業の発達のなか，地元出身者のＵターンのみならず県外出身者の流入によって近年人口の増加している沖縄県座間味島への流入人口について，人口移動のプロセスを個人レベルで分析した．第5報告は，フィリピンにおける農村から都市，あるいは他の農村への人口移動を，停滞するココナツ農村の人々の生存戦略と位置づけ，彼らの意志決定のメカニズムを考察した．（中川聡史記）

第23回国際人口学会大会

国際人口学会（International Union for the Scientific Study of Population）は，4年毎に大会（General Population Conference）を開催する．その第23回大会が1997年10月11～17日に北京で開催された．今回の参加者は1,152名にのぼり，うち半数に近い555名が中国人参加者だった．日本からは24名が参加し，うち10名（阿藤誠，岩澤美帆，小島宏，小山泰代，佐々井司，佐藤龍三郎，鈴木透，仙田幸子，高橋重郷，渡邊吉利）が当研究所からの参加者だった．

今回大会では，23のフォーマル・セッションと43のインフォーマル・セッションが開かれたが，そのタイトルは以下の通りである（I.35はキャンセルされた）．やはり多いのは出生力研究で，先進国に